



Title	高岡幸一さんを悼む
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	Gallia. 2021, 60, p. 113-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79401
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高岡幸一さんを悼む

柏木 隆雄

高岡幸一さんの体調が思わしくないのではないかと、阪大のフランス語、フランス文学関係の人たちから、それとなく耳にしながら、一種の隠遁生活を送っておられるのだと、毎年の年賀状にある「春風献上」の文字に象徴される、いささか仙人めいた高岡さんの風姿から、ずっとそう思って、しきりに消息がないことを心配される大高先生にも、いや元気にしておられますよ、と断言して見せたりしていた。それが昨年暮れに厚子夫人から喪中の葉書を受け取って、逝去が現実となって現れ、うろたえてしまった。2006年に阪大を退職されてから悠々自適、予餞会に出てこられる時や門田江里さんが出演する狂言の会場で厚子夫人と同道されているのにひょっこり出会ったりするものの、お互い阪大にいた時のように、ゆっくりと酌み交わす機会も無くなってしまっていたのが今さら残念でならない。

学部3年の私が仏文研究室に進学した時、高岡さんは颯爽たる大先輩で、和田誠三郎、原亨吉両先生からも一目置かれ、また保野さんなどのうろさ型の先輩からも別格の扱いを受けていた秀才で、中村啓佑助手がナンシーに留学された後、助手代理を務められたが、一年もたたぬ間に、和田先生が教授として赴かれた南山大学に助手として赴任し、その年ポアティエ大学に留学、ラシーヌとウェルギリウスをテーマにした博士論文を引っ提げて帰国されて南山の助教授となり、阪大言語文化部に戻られたのは1978年のことで、私は神戸女学院大学勤務3年目、女子学生と愉快な日々を満喫していた。

その5年後、思いがけなく私が文学部に赴任することになり、高岡さんと同じキャンパスで仕事をするようになった。着任当座から、いろいろと気を使って様々な点で力を貸してくださったのが高岡さんで、以後20年を超える在任中、どれだけ高岡さんの度量遠大な親分肌の気っぷに助けられたことか。

じつは近頃はやりの終活をしようと、古い映画や個人的な記録など、録り溜めた沢山のビデオテープをDVDにダビングする作業を始めているが、先日も2000年6月に千里阪急ホテルで行った小さなちくま学芸文庫本の出版記念会のテープが出てきた。東京、広島などを含めた各地遠来の客に、職業、年齢の実に多種多様な方々が集まってきて下さっているのを、よくもまあ厚かましくも声をかけたものだと、今更ながら有難くも、また申し訳なくも、またつくづく恥ずかしく思ったのだが、その司会を和田章男さんと高岡さんが務めてくださっているのだ。おまけに開会のあいさつもお願いしている。こんな小さい本でなんと大袈裟なこと、と内心思っておられたことだろうと、今にして自分の厚顔無恥に赤面し、高岡さん、和田さんを始め出席の皆さんに詫げるほかない。それにしても後輩の私に、

映像の中の高岡さんは厚仁無比にことを処して、にこやかに参加者たちと対応してくださっている。何事もお祭り騒ぎの好きな私のこと、こうしたことで高岡さんや和田さんに迷惑をかけた例は枚挙にいとまがない。翻って考えれば（翻らなくても）、私が大過なく阪大の仕事を終えられたのも、阪大の教員全員で執筆したフランス文学史、文法書、中級読本の3部作が完成できたことも含めて、高岡さんの寛大な統率と深い配慮とがなければ出来上がっていなかった。改めて深い感謝を捧げたい。

高等学校の折からドイツ語に精通していて、大学では第一外国語にそのドイツ語ではなくフランス語を選び、ギリシャ語、ラテン語、イタリア語、古フランス語にいたる稀に見る語学の達人高岡さんのお仕事を振り返ると、専門とされたラシーヌについての博士論文はもちろん、ルネッサンスの詩人たちは、フランスのみならずイタリア、スペインに及び、さらにはサンスクリット語の文献を駆使しての『今昔物語』の淵源を探る文章もあり、その悠々とした風貌に似合わしく、堂々として、遠大な視野で書き上げられたものばかりだ。あたかも南方熊楠をフランス風に装わせたような学風とも称し得ようか。

君子の好述たる厚子夫人といつも並んで登場する姿は、まだ結婚しておられない学生時代から羨ましい光景として眼の奥に残っている。好配を亡くされた夫人の加餐を祈るや切なるものがある。

（大阪大学名誉教授・大手前大学客員教授）